

## 黒羽芭蕉の館だより⑤

このコーナーでは、毎月一回、黒羽芭蕉の館の催し物や収蔵・展示資料などについて紹介していきます。

### 『おくのほそ道』の旅



〈旅に病んで夢は枯野をかけめぐるといふ辞世の句が示唆するように、芭蕉は41歳から51歳で死去するまでの11年間を旅に生きました。その代表的な旅が『おくのほそ道』の旅です。西行を慕う芭蕉は、西行の五百回忌にあたる元禄2年(1689)、46歳の時に深川(現江東区)の芭蕉庵を他人に譲り、3月27日(新暦5月16日)、『おくのほそ道』の旅に出ました。門人曾良(当時41歳)が同行しています。

自身の生きる道を俳諧一筋と定めていた芭蕉は、東北・北陸のいまだ目にしたことのない歌枕を訪ね、俳諧芸術を高めようと考えています。深川から大垣(現岐阜県大垣市)までの5か月間の長旅で、知人も少なく、多くの苦勞を伴う旅でしたが、芭蕉は各地で人々の温かい情に触れ、人を寄せ付けない大自然や歴史に彩られた歌枕・史跡をたどったのです。

でもこの二つの章は平泉と並ぶ三大ピークとなつています。本文では「松島は笑ふが如く、象潟はうらむがごとし」として、明るい太平洋岸の松島と沈鬱な日本海に臨む象潟の風情が対照的に表現されます。

『おくのほそ道』全体の基調をなしているのは無常観で、その一つの典型は平泉の章です。ここで芭蕉は源義経や奥州藤原氏三代の栄華がはかない夏の夢のように消えた歴史に想いをさせており、〈夏草や兵どもが夢の跡〉の名句を配しています。

また、『おくのほそ道』には、仏五左衛門(日光)・かさね(那須野)との出会いや、市振での遊女とのめぐりあい、金沢における一笑の墓前での涙、山中温泉での曾良との別れといったさまざま印象深い出会いと別れが描かれています。その中で、芭蕉が那須野で草を刈る農夫から馬を借り、かさねという名のかわいらしい小娘と出会う場面は、何とも微笑ましいものです。この逸話に基づき、黒羽芭蕉の館の庭には、関谷光生氏制作(平成元年)による馬上の芭蕉と随行する曾良のブロンズ像が立っています。



芭蕉と曾良のプロシズ像

### ■問い合わせ

黒羽芭蕉の館 TEL (54) 4151

## 彫刻

### 市内で作られた作品とその作者

## 周遊 ⑫

このコーナーは、「那須野が原国際彫刻シンポジウム」で公開制作、設置された作品とその作者を連載で紹介しています。

この作品は、ふれあいの丘の芝生広場の東側に並んでいる彫刻群の中の1つです。



### はずむ心

なかやま ひさこ 中山 尚子 (栃木県) 1997年

丸みがあって、ふくよかなこの作品は、タイトルのとおり今にもはずみ出しそうなそんな雰囲気を見せています。「女性の体のまるみや、なめらかな曲線、柔らかさを美しい」と考え

ていた作者は、硬くて重い石の中に、「見ていて楽しくなるような、うれしくて弾むような気持ち」を注ぎ込んで、丸くて柔らかいモノへと見事に变身させました。

人体をイメージして制作したといいますが、皆さんの目にはどのように映っているでしょうか。作者は1975年栃木県生まれの中山尚子さん。



中山尚子さん

彫刻シンポジウムでこの作品を手掛けた時は、まだ宇都宮大学の大学院生。まさに若さに満ちあふれていたときの作品です。現在は文星芸術大学の事務職員として、美術を志す若者たちのサポートをされています。

### 設置場所案内図(★印)



### ■問い合わせ

文化振興課文化振興係 TEL (23) 8718